神戸大学経済経営研究所
Research Institute for Economics and Business Administration, Kobe University

■コラム　RIEB ニュースレターNo.253　2024 年 1 月号

言葉の壁、デバイスの壁

神戸大学　経済経営研究所
教授　上東　貴志

2024 年 1 月 1 日に能登半島で発生した最大震度 7 の地震、それに伴う津波と余震におきましては、被災された皆様にお見舞いを申し上げますとともに、犠牲者の方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。翌 1 月 2 日には、能登半島の被災地支援に向かう海上保安庁の航空機と日本航空機の衝突事故が起きました。この事故で亡くなられた海上保安庁の職員の方々に対して、心よりご冥福をお祈りします。さらに、これらの不幸な出来事の犠牲者の方々のご遺族と関係者の皆様に、深い哀悼の意を表し、心からお悔やみを申し上げます。

神戸では、1995 年 1 月 17 日に起きた阪神・淡路大震災から来年で 30 年目を迎える。また、私は羽田空港を昨年 12 月に利用したばかりでもあり、震災も飛行機事故も全く他人事ではない。それは、多くの日本人が感じていることではないだろうか。

さて、私が働く神戸大学六甲台第 1 キャンパスは交通の便が良いとは言い難いものの、車での移動なら新幹線の新神戸駅まで約 15 分、神戸空港まで約 25 分という、非常に恵まれたロケーションにある（移動時間は Google マップによる）。海外へ行く場合も、神戸空港から羽田空港経由で国際線に乗り継げば非常にスムーズだ。

昨年 12 月、コロナ禍以降初の海外出張として、南米コロンビア第二の都市・メデジンで行われた国際会議に参加した。コロンビアは一般的に治安の悪い国としての印象が強いが、近年大きく改善したようで、私自身は滞在中に治安の悪さを感じることはなかった。と言っても、現地には 2 泊しかせず、一番の繁華街に行ったわけではないので、治安の悪い場所に行かなかっただけかもしれない。また、事前に警戒して、日本で普段使っているスマホやクレジットカード等の盗まれると困るものは持ち歩かなかったため、その安心感もあったのかもしれない。

コロンビアの公用語はスペイン語で、私の訪れた場所では英語が通じる人は少なかった。以前なら、言葉の通じない場所で、付け焼き刃で覚えた片言の現地語で苦労しながらコミュニケーションを取るのも海外旅行の醍醐味だった。英語や片言の現地語で何度もやり取りをして、結局何も通じなかったことも多いが、それも楽しい思い出だ。逆に伝わった時は、それだけで心が通い合えたような喜びがあった。

ところが今では、スマホの翻訳アプリのお陰で、言葉の通じない場所でもコミュニケーションが取れるようになった。片言では不可能だった複雑な情報のやり取りが、お互いにスマホに向かって話して画面を見せるだけで可能になったのだ。情報交換という観点からは、言葉の壁はもはや消滅したか、少なくとも、多少の手間で越せる程度の低いものになったと言えるのではないだろうか。

その一方で、翻訳アプリやオンライン会議等のデバイスを介したコミュニケーションには限界もある。コロナ禍では、多くの会議や学会がオンラインで行われた。オンライン会議は、移動せずに、世界中のどこからでも参加できる便利さがあり、慣れてしまえばそれだけで十分なのではないかとも思えた。対面でなくても、デバイスを介したコミュニケーションだけで必要な情報のやり取りができるのではないか、と。オンライン会議は今でも活用する機会が多く、特に少人数の会議の場合は非常に有効だ。

昨年、コロナ禍以前の日常のかなりの部分が戻り、会議等も対面での開催が多くなった。それで地球の裏側で行われた国際会議にも現地参加したわけだが、対面での会議に参加することで、オンライン会議で失われていたものに改めて気付かされた。それは休憩時間のちょっとした挨拶だったり、雑談だったりするのだが、特に感じたのは、オンラインで話を一方的に聞いただけでは、受け手の中では話は完結していないのではないかということだ。

具体的な例を挙げると、大きな学会で誰かの講演を聞いた後、横に座っている人や知り合い等に、「さっきの話どう思いましたか？」等と意見交換することで、心の中では初めて話が収束に向かうように感じられる。この収束感はオンラインでは得られない。オンラインでは、他の参加者と１対１で雑談するのは難しく、自分の感じたことが他の人と共有されているのか、自分だけのものなのか分からない。対面開催の学会では、周囲の参加者と多少の意見交換をするだけで、講演という情報の一方的な受け手にならずに、多角的に情報を消化できる大きなメリットがある。

似たような例としては、対面開催の小規模な研究会における報告でも、報告者本人の報告に加え、その後の討論や議論があれば、たとえそれに自分が加わらなかったとしても、理解が格段に進むことが多い。ある種の研究会では、報告は話題提供と呼ばれることもあり、その後の議論の方が重要な場合すらある。他には、ネットのニュースサイトでも、ニュース記事の後に、その下のコメントを読んで、「なるほどね～」と思うことも多いし、ドラマや映画を観ても、レビューサイトで他の人の感想に共感したり意外に思ったりすることで、初めて納得できるところがある。こういった話題提供と議論のような組み合わせから得られる納得感は、コロナ禍前には日常的な対面会議にも存在したのだが、コロナ禍で気付かぬうちに失っていて、その後取り戻したことで初めてその大切さを意識することができた。

もう一つ、オンライン会議で失われていたものをあげれば、それは議論のテンポだろう。オ

ンライン会議では、話者の発言が完全に終わるまで他者は（通常）発言を控え、そうでなくても微妙な時差があるため、議論のテンポが非常に悪い。議論というよりも、順番に意見を述べている状態に近い。昨年、久しぶりに多人数での対面の議論に参加した際には、オンラインでは得られなかったテンポの良さを痛感した。テンポが良ければ議論は活発になり、やり取りされる情報やアイデアも格段に増える。

私の持論として、世の中の多くのことは、お笑いの「ボケ」と「ツッコミ」の組み合わせとして説明できる。講演は（講演者に対して失礼だが）ボケのようなもので、その後の周囲の人との雑談がツッコミである。だから、ツッコミがないと物足りないし収まりが悪い。報告と討論も、ニュース記事とコメントも、映画とレビューサイトの感想も、全てボケとツッコミとして理解できる。

漫才の場合、絶妙なテンポと間でボケとツッコミが繰り返されることで笑いが生み出される。言葉では言い表し難いが絶妙なテンポと間は、観客を引き込み、笑いを誘発する不可欠な要素だろう。逆に言えば、M-1 グランプリで決勝に勝ち進むような爆笑漫才の文字起こしをして、その字面だけを読んでも、同じような爆笑には至らないだろう。

字面だけで再現できないのは視覚的な表情や身振り、声のトーン等も含まれるが、絶妙なテンポと間は特に、現在のオンライン会議やスマホの翻訳アプリでは再現するのが難しい。将来的なオンライン会議では、全ての参加者があたかもその場にいるかのような空間が実現し、テンポと間も再現できるかもしれない。そんな日がくれば、それが「デバイスの壁」がなくなる日なのかもしれない。しかし、言葉の通じない者同士が翻訳アプリでテンポ良くやり取りをして笑いを生み出すには、まだまだ越えられない「言葉の壁」が多いのではないだろうか。

そんな中、思い出すのは、コロンビアで私が宿泊したホテルのフロントデスクで働く若者とのやり取りだ。スマホの翻訳アプリを使って私が「明日の朝、タクシーを予約したい」と伝えると、彼はスマホに向かって何かを話した。その後、翻訳アプリの画面を見て、私は思わず笑ってしまった。そこには「明日の朝、象を予約しますか？」と書かれていた。私たちはその間違いに大笑いし、その後、彼は「タクシー」を「象」と言い間違えたことを認め、私たちは再び笑い合った。

私たちが直面する「言葉の壁」と「デバイスの壁」は、以前と比べれば低くなったものの、まだまだ大きく立ちはだかっている。しかし、その一方で、それらの壁を乗り越えることで生まれる新たな経験や人間関係、そして笑いは、私たちの生活を豊かで楽しいものにしてくれる。私たちがそれらの壁を越えて完全なコミュニケーションを実現するための道のりは長いかもしれないが、その過程で得られる経験や学びは、私たちの人間性を深め、人間らしさを再確認させてくれるだろう。

そして、それはまさに、ボケとツッコミの組み合わせのようなものだ。言葉の壁やデバイスの壁を乗り越えて生まれる新たな経験や人間関係は、私たちの人生に新たなボケを提供し、私たち自身がそれに対するツッコミを返すことで、私たちの人生は豊かで楽しいものになる。それが私たちの人間性を深め、人間らしさを再確認させてくれるだろう。

（最後の 3 段落は、OpenAI の GPT-4 に、それまでの文章を続けて完結させるように指示して生成し、微修正したものです。心温まるエピソードは GPT-4 の創作です。）